年間第14主日(A 年)福音書の黙想

年間第14主日(A年)の福音朗読ではマタイによる福音書11章25-30節が読まれます。マタイ11·28-30に関連する聖ホセマリアの言葉を紹介します(説教より抜粋)。聖人は「キリストに倣う」「キリストの謙遜に学ぶ」「キリストの軛を負う」という観点から福音書の言葉を黙想します。

キリストに倣う

忍耐強い聖心のうちに入り込み、主の命令と愛の泉から力を汲みとる。 一言でいえば、イエスに同化するのです。兄弟である人々の中にあって、本当にくもう一人のキリスト>であると言えるようになるために努力しなければなりません。

ごまかしでないことを確かめるために、マタイ福音書の他の箇所を読んでみましょう。第十六章を見ると、主は一層明確に教えておられましたしについて来たい者は、の十字架を背負ってがを捨て、自分の十字架を背負への道でもありません。 が表して、強性と依託の道でも気がある。しかし、悲しみの道でもありません。

ベツレヘムのまぐさ桶からカルワリオの玉座に至るまで、道々キリストがお示しになった模範にもう一度目をやり、飢えや渇き、疲れや暑さ、 睡魔や虐待、無理解や涙など、あら

ゆる種類の窮乏を忍び、自己を放棄 する主、そして、全人類の救いを 思って喜ぶ主について黙想しましょ う。「あなたがたは神に愛されてい る子供ですから、神に倣う者となり なさい。キリストがわたしたちを愛 して、ご自分を香りのよい供え物、 つまり、いけにえとしてわたしたち のために神に献げてくださったよう に、あなたがたも愛によって歩みな さい」図。このように呼びかけた聖 パウロの言葉を、心と精神に刻み込 んでいただきたい。何度も黙想し、 実行に移す努力をして欲しいので す。

(ホセマリア・エスクリバー『神の 朋友』128)

キリストの謙遜に学ぶ

主イエス・キリストは、教えを垂れるとき、たびたび自らの謙遜を模範としてお示しになりました。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたし

の軛を負い、わたしに学びなさい」 国、これは、人間が自己の虚無を率 直に認めるほかに神の恩寵を引き寄せる道はないという教えです。 食べかたちのために主は来られた。食べかを与えるために渇きを感じ、不死の体をまとわせるために滅びる人間の体を持ち、豊かにするために貧しさのなかに来られた」 [5]。

(ホセマリア・エスクリバー『神の 朋友』97-98)

心の底からイエスに倣わないなら、 主のように謙遜でなければ、真の朗 らかさを得ることは到底できないで しょう。神の偉大さがどこに隠れて いるか気が付きましたかと、もう一 度お尋ねします。岩穴の中で布に包 まれて、飼い葉桶の中においでにな るのです。謙遜に振る舞い、自分の ことだけを考えるのをやめて、人を 助ける責任を感じるときのみ、私た ちの生活は贖いに役立つものとなり ます。

善良な人たちでさえ、個人的な悩み を作りだし、それを重大問題に発展 させることがよくありますが、大抵 の場合、客観的な基礎が欠けている ものです。問題の原因は自己をよく 知らないことにあり、自己を知らな いがゆえに傲慢になっているので す。皆の中心になりたいとか、注目 や称替を浴びたいとか、面子がつぶ れないように図るとか、善のために 尽くしても知られずにいるのを好ま ないとか、自己の安全を追求すると か、すべて傲慢の証拠です。こうし て、この上ない平和を味わい、大き な喜びに浸ることができるはずの多 くの人々が、傲慢と自負心のため に、不幸で実りのない人間に変わっ てしまうのです。

(ホセマリア・エスクリバー『知識 の香』18)

キリストの軛を負う

自己の聖化への確固たる希望は神の 賜物です。しかし、自分からは何も しない受身の態度を保つわけにはい きません。キリストは「わたしにつ いて来たい者は、自分を捨て、 日々、自分の十字架を背負って、わ たしに従いなさい | ほと言っておら れるからです。よく読んでくださ い。日々の十字架だ、と言われま す。「一日として、十字架のない日 はなく」、主の十字架を背負わない 日や、キリストのくびきを受け入れ ない日が一日もないように、と。こ のようなわけですから、復活の喜び は十字架の苦しみを経てはじめて味 わい得るという事実を思い出してく ださい。

しかし、十字架だと言っても恐れる ことはありません。主自ら次のよう

に仰せになりました。「疲れた者、 重荷を負う者は、だれでもわたしの もとに来なさい。休ませてあげよ う。わたしは柔和で謙遜な者だか ら、わたしの軛を負い、わたしに学 びなさい。そうすれば、あなたがた は安らぎを得られる。わたしの軛は 負いやすく、わたしの荷は軽いから である一切と。聖ヨハネ・クリゾス トムは説明を加えています。「来る がよい、と仰せになるが、それは会 計報告をするためではなく、罪を赦 されるためである。来るがよい。私 に栄光を帰する必要があるからでは なく、あなたたちの救いが必要だか らである。軛と言われても驚くには 当たらない、快い軛であるから。重 荷と聞いて恐れなくてもよい、軽い 荷であるからしい。

聖化の道を歩めば毎日十字架に出合うことでしょう。と言っても、不幸な道ではないのです。キリストご自身の助けがあり、キリストと一緒で

あれば悲しみの入り込む余地はない のです。「喜びのうちに、一日とし て十字架のない日のなく」と私は何 度も繰り返しています。

(ホセマリア・エスクリバー『知識 の香』176)

[1] マタイ11・29

[2] マタイ16・24

[3] エフェソ5・1-2

[4] マタイ11・29

<u>[5]</u> 聖アウグスティヌス『詩篇註解』19, 19 (PL 36, 577)

[6] ーペトロ5・5

[7] フィリピ3・21

- [8] ルカ9・23
- [9] マタイ11・28-30

[10] 聖ヨハネ・クリゾストム『マタ イ福音書についての説教』37,2 (PG 57,414)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-sekkyo-matai-11-28-30/(2025/12/11)